日本野鳥の会

No.47
1999年3月発行

新潟県支部報

マイ スコープ

「西蒲原の水田地帯で越冬するコミミズク」

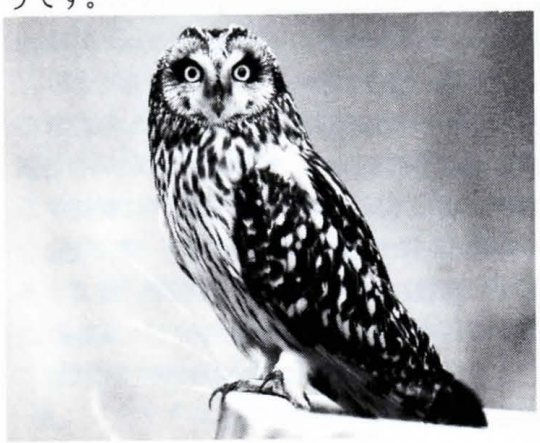
巻町 佐藤吟一

私の住む西蒲原は県内有数の稲作地帯で、一面に水田が広がっています。そこに、10月中旬、瓢湖へハクチョウの第一陣がやって来たとニュースで伝えられるころ、コミミズクも渡って来ます。

昼間彼らはネグラでじっとしています。ネグラは車や人通りの無い畦道などの枯れた草むらで、刈り取り後の少しのびた稲の切り株の間などもネグラに利用されます。

日中でも活動することがあると言われますが、当地では、日中見かけることは少ないと思います。近くを車や人などが通った時、驚いてネグラを飛び出したような時、日中でも飛んでいることがあります。

日没後、数十分位して、暗くてほとんど見えないような時間になると飛び回るようになります。畦道や水路の土手などに沿って上空数mの高さを飛び回り、ネズミを捜しているようです。



日の出前、まだ暗いうちにネグラ近くへ数羽が集まってきて、その後、小移動してネグラに入ります。ネグラに入るとコミミズクの羽の色は枯草にそっくりで、ほとんどまわりの草と見分けがつかなくなります。

西蒲原は、県内では積雪の少ない地域です

が、1～2週間は数十cmの積雪に覆われることがあります。そんな時、コミミズクの数は少なくなるようですが、残っているものもいます。

積雪期のネグラは、雪で覆われ隠れる草などが無くなるため、樹上にかわるようです。以前常緑広葉樹のしげみの中に6羽が、止まっているのを見ました。また、トラフズクのネグラにコミミズクがまじることもあります。

その後3月下旬になると、彼らの姿は見られなくなります。考えてみると、コミミズクは約半年を日本の水田地帯で暮らしていることになります。

キバシリの繁殖記録

津川町　渡部　　通

はじめに

東蒲原地方では、1980年からキバシリが相次いで観察されており、山地のブナ林はもとより低標高のコナラを中心とした山域及び人家周辺でしばしば確認されるなど、興味深い結果が得られている。本種の観察記録や繁殖等については、すでに概要が報告[1)~7)]されているが、今回、新たに2例の繁殖の記録が得られたので報告する。

図1　営巣環境　(1997.4.19)

結果及び考察

(事例1)

・観察年月日と天候：1997年4月19日　くもり時々晴れ

・時　間：午前11時15分～11時50分

・場　所：東蒲原郡鹿瀬町日出谷

・環　境：山の斜面、下部全体を杉人工林が覆っており、中部から上部にかけてはコナラ、ミズナラ、イタヤカエデ等の落葉広葉樹で構成され、林床にはヒメアオキ、ハイイヌガヤ等が認められた。営巣地の標高は約150mである。

・状　況：樹林の中からキバシリの特徴的な細い金属性の声が聞かれたので、双眼鏡で見ると、餌をくわえながらコナラの幹を垂直にのぼる親鳥が認められた。親鳥はコナラの幹から次の幹へと飛び移り、最後に杉の幹に飛んで巣のある根元に移動して巣穴に入った事から、育雛中の段階であることが推定できた。

営巣地は南側斜面で、営巣木は直径80cmのスギで、地上より30cmの根元の部分では樹皮が一部むけており、裂け目となった部分に巣が作られていた（図2)。

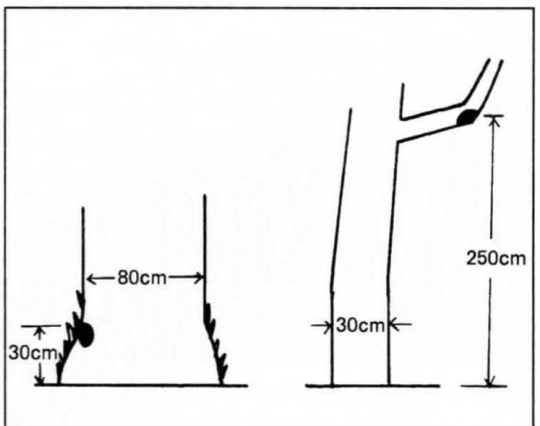


図2　キバシリの巣の位置と地上からの高さ

親鳥は餌をくわえて直接営巣木に飛んでくる事はなく、樹幹へと移り進みながら営巣木に移ってくる事が多かった。巣が地上より30cmという低い場所に作られたという事もあり、親鳥は杉の幹に飛来したあと、うしろむきのまま螺旋上に下がり、巣穴にさしかかると横向きになって巣穴の中にいるヒナに給餌する事が多かった。餌はクモやアリ、ガの成虫などで、頻繁に餌を運んでくる事や、親鳥が巣穴に入るとヒナの声が比較的大きく聞かれたことなどから、ヒナはかなり成長した状態であることが推察された。

（事例2）

・観察年月日と天候：1998年2月26日　くもり時々晴れ

・時　間：午前9時20分～11時25分

・場　所：東蒲原郡鹿瀬町日出谷

・環　境：コナラを中心とした二次林で構成されており、営巣地の標高は約250mである。

・状　況：餌をくわえながら巣穴に入る親鳥を発見する。営巣木は直径30cmのコナラで、巣穴となっている横枝は大半が枯損し、キツツキ類のあけた穴を利用していた（図2）。巣の位置は積雪等の影響で正確に測定できなかったが、地上から約2m50cmであった。営巣地は南東斜面で、他の場所と比べ雪どけが進んでいたが、それでも積雪は深い所で1mを越えており、平均的70cm前後であった。

給餌はペアが交代で行い、給餌回数は午前10時～11時までの1時間に合計で12回を数えた。また、巣穴から出る時に糞をくわえて運び去るのが4回観察された。

今回の繁殖例は、これまでの記録を通じて最も早い結果となった。孵化後、一週間前後と推定した場合、過去のデータ等から逆算すると、孵化は2月19日頃、抱卵開始日は2月4日頃になる。これまでの繁殖例から抱卵開始日の平均を算出してみると、4月1日となるが、

図3　樹幹をのぼるキバシリ成鳥　（1998.2.26）

図4　樹幹で餌を探すキバシリ　（1998.2.26）

これに比べて今回はかなり早い時期に抱卵が開始された事になる。さらに、巣作りは1月下旬～2月上旬にかけて行われたと思われが。営巣活動の早まった要因は色々考えられるが、近年の暖冬傾向が少なからず影響しているのかも知れない。

文　献

1) 渡部　通（1988）：上川村月山でキバシリを観察．四季のつどい，14：35.

2) ――――（1989）：上川村月山におけるキバシリの繁殖．野鳥新潟，73：6－7.

3) ――――（1990）：東蒲原地方におけるキバシリの生態．野鳥新潟，76：2－3.

4) ――――（1991）：キバシリの巣立ち．野鳥新潟，79：3.

5) ――――（1992）：キバシリの繁殖生態．四季のつどい，18：5－6

6) ――――（1992）：キバシリの繁殖と家族群の観察．野鳥新潟，82：4.

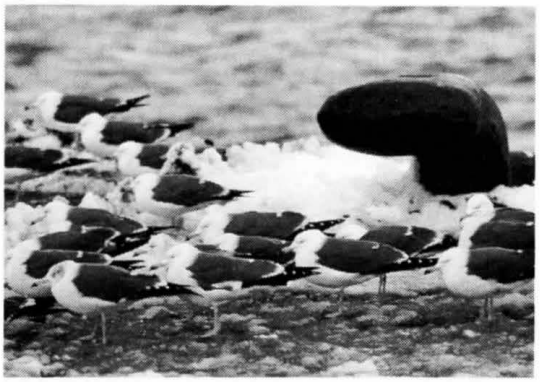
7) ――――（1993）：人家周辺でキバシリが繁殖．野鳥新潟，85：6.

厳冬季・寺泊探鳥会20回目を終えて

新潟市　渡 辺 弘 雄

例年2月の上旬に催される冬期の寺泊探鳥会は、顧みると今から21年前の'79年2月4日が初回であった。その後4回目の探鳥会の時、次回は他の場所に移したいとの要望があったが、寺泊は本県海岸線のほぼ中央に位置しているので、今後も継続して欲しいとの事になり、毎年2月にこの探鳥会が開催されてきた。1996年の探鳥会は、直前の豪雪のため中止となったが、これ以外は順調に回を重ね、去る2月7日の探鳥会で、丁度20回目を終えたことになる。ここで会員の皆さんに、これまでの状況を簡単に報告したい。

探鳥会資料として事務局で作成しているリスト（表1、表2）に基づいて、鳥相の概況をかいつまんで述べたいと思う。今まで、20回実施した探鳥会で確認された鳥類は、総計27科77種になっている。科の段階で、それに含まれる種の多いものは、ガンカモ科13種、カモメ科8種、カイツブリ科及びアトリ各々5種である。出現頻度（リストは定性的表現）の高い鳥をあげると、ハジロカイツブリ・カンムリカイツブリ・ウミウ・マガモ・カルガモ・ウミアイサ・トビ・ユリカモメ・セグロカモメ・オオセグロカモメ・カモメ・ウミネコ・ハクセキレイ・セグロセキレイ・ヒヨドリ・イソヒヨドリ・ツグミ・スズメ・ムクドリ・ハシボソガラス・ハシブトガラスの21種である。此等の鳥は、2月上旬、海岸、港湾、河口などの環境要素を擁する当地域に、普通に観察される種類である。これらの中で、マガモやカルガモなどの淡水性カモは、生活の主体が河川や湖沼である。採食行動はどちらかと言うと夜行性である。特に狩猟期間（本県11月15日～2月15日までの3ヶ月間）の日中は、より安全な場所を求めて海上に出て休息集合しているものと推測される。一方採食が昼行性で、主に分水河口の海岸で潜水を繰り返している海ガモのクロガモとビロードキンクロは、最近は、本探鳥会やその日以外の探鳥でも、見ることが少なくなった。カモメ科のユリカモメとカモメは、この寺泊海岸では、他のカモメ類より数が少ないが、信濃川河川では多い。これまでの探鳥会当日に観察した種数を比較してみると、初回の'79.2.4は14種と最も少なかった。支部便り№3の資料によるとこの日は朝から悪天候となり、波浪注意報が出たと記されている事から、観察は大変困難であったと想像される。ところで、波浪注意報が出るほどの厳しい天候の時は、湾内にカモメ類が集まり、普段海岸近くに寄り付かない海鳥に出会える絶好のチャンスとなる。ウミスズメやミツユビカモメなどはそのような時に観察されている。20回の探鳥会における個々の出現種数を平均すると、約27種となった。冬季、海の探鳥会としては、まずまずの結果と思う。



本探鳥会は、新緑の山野に夏鳥が渡来し、美しい囀りを聞きながらの探鳥会とは様相が異なる。厳冬期、日本海の荒波とカモメたちと題して、まずカモメ類の識別方法を重点に、教える者、教わる者がお互い熱心に、学習して来たと思う。近年、日本の海岸線は人工的な要素が加わり、昔の姿の海岸が少なくなったと言われている。本探鳥会を契機に、越冬地の海鳥について、知識が深まり、関心が高まったとすれば、意義深いものがあったのではないだろうか。

表1　寺泊探鳥会で観察された鳥類

	種＼年月日	'79 2/4	'80 2/17	'81 2/8	'82 2/7	'83 2/6	'84 2/5	'85 2/10	'86 2/16	'87 2/15	'88 2/21	'89 2/26	'90 2/4	'91 2/3	'92 2/2	'93 2/7	'94 2/13	'95 2/5	'97 2/2	'98 2/1	'99 2/7	出現頻度	出現環境
1	アビ					○																・	B
2	オオハム						○															・	B
3	シロエリオオハム														○							・	AB
4	カイツブリ		○		○			○			○											・	AB
5	ハジロカイツブリ		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		◎	AB
6	ミミカイツブリ	○			○						○								○			・	AB
7	アカエリカイツブリ	○	○		○	○	○	○									○	○				○	AB
8	カンムリカイツブリ									○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	◎	AB
9	ウミウ	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	◎	B
10	ヒメウ	○			○	○	○						○									・	B
11	ダイサギ							○														・	A
12	コサギ			○																		・	A
13	クロサギ		○				○		○			○	○		○							○	A
14	ヒシクイ																	○	○			・	D
15	コクガン			○																	○	・	A
16	マガモ		○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	◎	B
17	カルガモ		○	○	○			○	○		○	○	○	○	○						○	◎	B
18	コガモ							○	○													・	B
19	オナガガモ	○		○				○				○	○			○			○		○	○	B
20	クロガモ	○	○	○	○	○		○	○				○									○	AB
21	ビロードキンクロ		○	○	○	○		○					○									○	AB
22	スズガモ								○						○				○			・	B
23	シノリガモ			○				○			○							○			○	・	AB
24	ミコアイサ		○																			・	B
25	ウミアイサ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	◎	AB
26	カワアイサ							○	○													・	A
27	トビ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	◎	DC
28	ハイタカ		○																			・	D
29	オジロワシ												○									・	D
30	ノスリ			○					○				○		○				○	○	○	○	DC
31	ハヤブサ																				○	・	D
32	チョウゲンボウ														○			○				・	D
33	キジ			○			○		○				○									・	C
34	シロチドリ		○				○								○				○			・	A
35	タゲリ			○			○								○					○		・	A
36	トウネン					○																・	A
37	ハマシギ				○		○								○							・	A
38	ミユビシギ		○																			・	A
39	イソシギ				○																	・	A

表2

	種＼年月日	'79 2/4	'80 2/17	'81 2/8	'82 2/7	'83 2/6	'84 2/5	'85 2/10	'86 2/16	'87 2/15	'88 2/21	'89 2/26	'90 2/4	'91 2/3	'92 2/2	'93 2/7	'94 2/13	'95 2/5	'97 2/2	'98 2/1	'99 2/7	出現頻度	出現環境
40	ユリカモメ		○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○		○		○	○	○	○	◎	AC
41	セグロカモメ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	◎	AC
42	オオセグロカモメ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	◎	AC
43	ワシカモメ	○			○				○												○	・	AC
44	シロカモメ							○	○		○					○	○		○	○		○	AC
45	カモメ	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	◎	AC
46	ウミネコ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	◎	AC
47	ミツユビカモメ							○	○		○											・	AC
48	ウミスズメ	○			○	○							○									・	B
49	キジバト			○			○						○	○			○			○		○	CD
50	カワセミ		○																			・	C
51	ヒバリ				○																○	・	C
52	ハクセキレイ		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	◎	AC
53	セグロセキレイ		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○		◎	AC
54	ビンズイ		○																			・	C
55	タヒバリ			○		○	○								○		○				○	○	C
56	ヒヨドリ		○	○		○	○					○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	◎	C
57	モズ			○									○		○			○	○		○	○	C
58	ジョウビタキ				○		○															・	C
59	イソヒヨドリ		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	◎	AC
60	シロハラ		○																			・	C
61	ツグミ		○	○	○		○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	◎	AC
62	エナガ		○																			・	C
63	シジュウカラ		○				○			○					○					○		・	C
64	メジロ																		○			・	C
65	ホオジロ			○										○				○				・	C
66	カシラダカ							○										○				・	C
67	アトリ																	○				・	C
68	カワラヒワ		○			○				○											○	・	C
69	ハギマシコ		○																			・	C
70	ベニマシコ		○	○														○				・	C
71	ウソ			○																		・	C
72	シメ		○	○														○		○	○	・	C
73	スズメ		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	◎	AC
74	ムクドリ		○	○	○	○			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	◎	AC
75	オナガ						○															・	C
76	ハシボソガラス		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	◎	AC
77	ハシブトガラス		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	◎	AC
	種・数	14	37	35	31	27	31	29	29	20	25	22	32	23	28	22	23	30	28	26	30		

A：海岸・港内　B：海上　C：陸地　D：上空　◎：時期・場所によってよく見られる　○：たまに見られる　・:めったに見られない

寺泊探鳥会報告

事務局　桑原哲也

2月7日、冬の日本海には珍しい晴れ間の見える天気に心を弾ませて寺泊に車を走らせます。一昨年より町の体育館から新規に完成した「ハマナス荘」が会場になり、展望のよい3階の研修室で、探鳥会の下見の様子などの説明を受けた後、車に分乗して寺泊港に向かいました。

港内はあいにく風が強く、風にあおられて飛ぶカモメなどの姿を観察でき、冬の日本海の厳しさを垣間見ることができました。初心者の方には港の埠頭の集団で休んでいるカモメの群れを観察し、ムミネコ、セグロカモメ、オオセグロカモメの違いを識別して見ました。

カモメ類の多くは上記の3種が多かったのですが、トビやユリカモメなども姿を見せていました。

続いて寺泊水族館に移動して観察をしました。例年水族館では時間を決めて海鳥の餌付けをしていて、カモメ類とトビの餌の取り方の違いを間近で見ることができました。(例えばトビは猛禽類ですから足を使って餌をつかみます、カモメ類は口を使って餌をくわえていました。)

残念ながら今年は不況の影響でしょうか、餌付けは行われず鳥たちが餌を取る姿は観察できませんでしたが、ウミアイサの番が岩場の荒波を縫うように泳ぐ様子はとても感動的でした。また、珍しいシノリガモがピエロのようなユニークな姿で波間を漂う姿が冬の厳しい海とのコントラストで印象的でした。カモメ類ではシロカモメ、ワシカモメが見られ、特にシロカモメは岩礁に止まったり、上空を飛んだりと十分その姿を堪能することができました。

寺泊で十分探鳥をしたあと、車で一路出雲崎へ向かいました。柏崎の小林さんから出雲崎港には「コクガンがいた！」という情報があって一行は期待に胸を膨らませてきました。

途中のテトラポットに海鳥が集まっている観察ポイントが、いくつかあり時々寄り道したのですが、残念ながら一般車の迷惑になるためすぐ移動となりました。

鳥のあとは魚というわけではありませが、昼食には本間、吉井、岡田さん達の手作りタラ汁をご馳走になりました。寒風にあおられ冷え切った体が暖かい部屋とタラ汁でホッカホッカになり、初参加の鈴木さん坂井さんをはじめみなさんに好評でした。

昼食後の鳥あわせでは30種類以上の鳥を観察することができ、楽しい探鳥会を終了することができました。帰りはアフターバードウォッチングで毎度お馴染みアメ横でショッピング！たぶん夕食には魚がメインメニューになったことでしょう。

さて、今回で寺泊の探鳥会は20回目の節目の探鳥会でした。県支部の行事の中でも歴史のあるものになりつつあります。なぜ20回も続いたのかと思うに、やはり県の中央に位置し全県から集まれる探鳥地であること、鳥以外に「アメ横で買い物」というオマケがついていることがポイントだと思います。

これは地元寺泊の竹内さん、渡辺弘雄さんをはじめ支部の歴代の役員の方々のご努力の成果と思います。これからも会員の皆さんに愛される探鳥会としてご案内をさせていただきますのでぜひ多数の参加をお待ちしております。

加治川に飛来したナベヅル

村上市 大滝 清二・新発田市 三母 伸一

1998年11月23日の早朝、聖篭町四ツ屋。加治川の中州でコハクチョウの群れの中に、一羽のナベヅルが発見された。(三母伸一)

コハクチョウの飛来数を調べるため、前日に続いて現地に赴き、夜の明けるのを待って調査を始めると、ハクチョウの白い塊の中に“紅一点”ならぬ“黒一点”、見慣れない鳥がいる。予期せぬ鳥の出現に緊張し、カウントもそこそこに観察に集中した。

後ろに風切り羽を垂らした姿で、一見してツルと分かったが、明るくなるにつれ見えてきた特徴から、ナベヅルの若鳥（性不明）と確認できた。(幼鳥に見られる頸部の淡黄色がなく、前頭部の赤色裸出部が成鳥ほど明確でない)。

撮影　本間隆平氏

9時頃、飛び立つのを待って新潟県愛鳥センターと新聞社の支局へ通報した。その後、記者を伴って四ツ屋へ戻りナベヅルを再度確認した。

翌24日、「風雅な珍鳥・聖篭にナベヅル」の見出しで、新聞の第一面に写真入りで紹介された。

ナベヅル一羽だけの飛来は、集団渡来地の九州出水へのナベヅル飛来数7,904羽(1月7日)で分かるように、文字どおり迷鳥珍鳥である。

従って、飛来したナベヅル、特にコハクチョウの群れと一緒にいる個体は特異な例で、ツル本来のものとは言えないだろう。とは言え、時折の来訪者、多少とも習性を知る上で役に立つことを期待し、ナベヅルのその後の状況をコハクチョウとの係わりをも含めて紹介して見たい。

「観察経過」

・11/22 6:30～8:00　(曇り)。加治川四ツ屋の中州。コハクチョウ1,141羽±。

・11/23 6:00～9:00　(雨)。四ツ屋で午前6:40、コハクチョウの中にナベヅルを発見。

・11/25 13:30～14:30　(曇り)。加治川村二本木の水田でコハクチョウ300羽±の中にナベヅルを発見。なお、コハクチョウ（緑104Y)、アメリカコハクチョウ（緑125Y）の標識鳥も確認された。

・12/6 7:30～8:30。増水で浅く水を被った加治川四ツ屋の中州でナベヅルを確認。コハクチョウ1,130羽±（上記標識鳥2羽を含む)

・12/25 6:30。加治川四ツ屋のコハクチョウの群れにナベヅルの姿なし。

・12/28 8:30～10:00　(曇り)。新発田市石喜、水の張った水田でコハクチョウとオオヒシクイの群れの中にナベヅルを確認。

・1/2 10:00 (雪)。四ツ屋の中州でナベヅル1とコハクチョウ成1009±幼99羽を確認。

・1/7 9:00～10:00 (曇り)。12/28日と同じ石喜の水田でナベヅルを確認。

・1/8 14:00 (雪)。ナベヅル四ツ屋の中州に戻る。

・2/9 8:30～9:00 (晴れ)。四ツ屋の中州でナベヅル1羽とコハクチョウ1,236±、アメリカコハクチョウ（緑104Y）を確認。

・2/24 8:30～10:00　(曇り)。四ツ屋の中州、すでに3分の2ほどのコハクチョウは北へ飛去。

渡り遅れた300羽±の中にナベヅルが混じる。
・2/25 8:00～10:00　(晴れ)。四ツ屋の中州でコハクチョウ300羽±とナベヅル1羽を確認。
・2/28 6:30(曇り)。四ツ屋の中州でコハクチョウ50羽±とナベヅル1羽を確認。
・3/3 6:30(晴れ)。四ツ屋の中州にコハクチョを認めたが、ナベヅルの姿なはし。

「行動の特徴」

◆ナベヅルは、おおむねコハクチョウの群れの近くで行動し、朝9時頃中州を離れ日暮れに戻った。コハクチョウにとって、ナベヅルは歓迎できない相手らしく、ナベヅルに後を付けられると急に旋回したり、中州へ逆戻りすることがあった。

水田で餌を採る時も、ナベヅルはコハクチョウの群れの中にいるよりは、その周辺、特に畔の上などを歩いて採餌していることが多かった。

餌は、コハクチョウと同様、主に水田で落ち穂をついばんでいたが、川の中州では、水中で小動物を採っているようであった。

ナベヅルは、常にハクチョウと一緒に塒を取り、四ツ屋とその南西8kmにある石喜の二箇所の塒を何回か往復していた。

◆ナベヅルとコハクチョウは、接近すると争いあうが、その時の力関係は、明らかにナベヅルが上位で、12月28日に石喜で見られたオオヒシクイとの争いでも同様だった。気性の荒さにもよるだろうが、ガンカモ類とは違い、ツル特有の長く鋭い嘴が優位に立たせるのだろう。

◆12月15日の夕暮れ、雨で増水し水没した加治川の中州へコハクチョウとナベヅルが戻ってきた。コハクチョウはすぐ着水したが、ナベヅルは鳴きながら上空を旋回している。ハクチョウの立ち姿で浅瀬が分かったのか、しばらくしてようやく降り立った。川の増水が、水上を泳ぐハクチョウと川底に足を付けて立つツルの習性の違いを、くしくも見せてくれた。

関係者の間では、①本来のコースをはずれた理由②飛来の経路③単独飛来かどうかまた、④積雪期の採餌、越冬……等、いろいろ疑問や心配が話題にでた。

その疑問を残したまま2月28日を最後にナベヅルは98日間の滞在の後、コハクチョウの北帰と共に姿を消した。ナベヅルは、厳しい冬を逞しく生き抜き、野性のままの優美な姿を見せてくれた。無事の渡りを願っている。

ハイイロウミツバメの飛来

柏崎市　小林成光

新年早々に、珍しいハイイロウミツバメが保護されたので報告します。

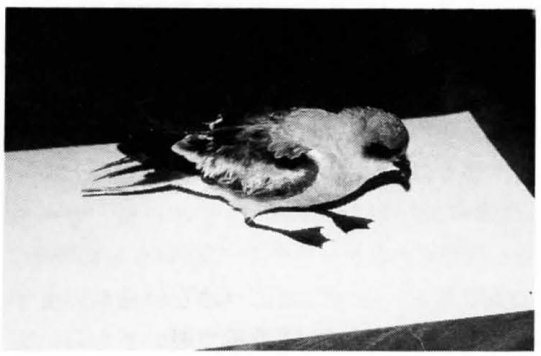
保護の状況：1999年1月5日、晴れ（積雪も無く、晴れて温かな日であったが、前日は小雪の混じる少々荒れぎみの天候）。

午前8:30分頃、柏崎市剣の石崎ヨキさんが自宅玄関にうずくまっている鳥を発見。夕方ペットショップの指導でビタミンドリンクとスリエを少々与えた。午後8時すぎ連絡を受けた小林は、計測・撮影をした後、電気アンカにて保温し安静を保った。翌1月6日、曇り、元気であるため午前7時、柏崎市北園町の海岸にて放鳥した。

計測値：体重45.0g、翼長169㎜、尾長70(短)～102（長）㎜、ふしょ長25.0㎜、嘴峰長15.0㎜、会合長19.0㎜、触診では餌が獲れて無いように思えた。

新潟県の記録：これまで、冬季に村上市、新潟市、佐渡島で記録がある。

文献：日本野鳥の会新潟県支部編(1997)「雪国の鳥を訪ねて」．新潟日報事業社



佐潟に来たクロツラヘラサギ

新潟市　伊藤定市

1998年11月30日15時30分、佐潟でクロツラヘラサギを見つけました。

その日は朝から何かと雑用があって忙しく、昼過ぎまでばたばたして15時ころになってやっと身体が空きました。新潟市の要請による佐潟のボランティア解説員としての仕事が12月から始まるので、ちょっと佐潟の様子を見に行ったのです。

月曜日ということで新設の観察センターは休館していましたから、センターのすぐ外の木柵のあたりで観察を始めました。

いつもの習慣で左から右へ双眼鏡でざっと見回したところ、古い観察舎の手前の水際に常連のダイサギとはちょっと違ったタイプの白い鳥を見つけました。

おやっ！と20×～60×の望遠鏡で確認したところ、なんと、私にとっては観察を始めてから25年間に2度めにあたるという珍しいクロツラヘラサギではありませんか。見違えではないか、夢ではないかとほっぺたをつねって見直しましたが間違えありません。

胸の高鳴りをこらえながら暫く確かめに時間を費やした(つもり！ですが、ものの１分～２分くらいか？)後、早速手帳に記入し、500mmの望遠レンズで撮影しました。

さて、この感動をどうしましょう。だれかと分かち合いたい、共にしたい。あいにく、観察センターは休館。まわりには、パラパラとハクチョウ目当ての来訪者が2～3人いるだけ。クロツラヘラサギなどと言っても聞いたこともないと言われるような気がして、自分ばかり専門家ぶっているようなひけめも感じて、暫くは黙って観察をつづけました。

しかし根がしゃべっちょこきの私、と一っても我慢できなかーったよー、というものです。

隣で見ている老夫婦に「珍しい鳥がいますよ。」と声をかけて、望遠鏡で覗いてもらいました。「世界中でも数が少なく絶滅が心配されているの鳥で、日本国内でも滅多に見られず、新潟県内で25年間に私が見たのは今日が2度目なんです。」などという解説を（くどくどと）言ったような気がします。

それからも2～3の人に見てもらいましたが、

クロツラヘラサギ　(1000mmレフ、F1：8)

暮れが早い冬の日。感激を胸に帰宅し、2～3の方に電話しておきました。

翌朝から何度か行き、大勢の方々にも確認

クロツラヘラサギ　(1000mmレフ、F1：8)

してもらい、写真も何枚か撮りました。

12月12日までは確認しています。元気でまた来て欲しいと願っています。

インタビューコーナー

今回から会員の方々にインタビューするコーナーを設けました。第一回は、新潟市の**西村真智子さん**です。西村さんは、昨年会員になられたばかりの新潟大学生の方です。平成10年12月13日(日)に新潟市鳥屋野潟で開催された「ビギナーズ探鳥会」の後に新潟県立図書館で末崎がお話しを伺いました。

末崎(以下M)：今日の探鳥会はいかがでしたか。

西村(以下N)：寒かったです。

M：冬の探鳥会なのに防寒着の準備のこととか案内が足りませんでしたかね。すみませんでした。西村さんは新潟大学の学生さんだそうですが、何年生ですか。

N：経済学部の一年生です。

M：新潟出身でしょうか？野鳥の会に入られたきっかけは？

N：新潟生まれの新潟育ちです。自宅はわりと海の近くで、浜には松林とかあって、しょっちゅう鳥は見かけていたんですけれど、別に名前なんて知らなかったんです。大学合格をきっかけに時間に少しゆとりができたんで、新潟市報に載っていた探鳥会案内を見て事務局の本間さんの所にうかがい、新潟県支部に入会しました。色々な行事に参加したかったんですけれど、車がないのと、部活動の関係で、遠くで開かれる探鳥会などにはなかなか参加できず、今日の探鳥会の場所が新潟市の鳥屋野潟ということで参加しました。

M：それだとなかなか探鳥会に参加するのは大変ですね。私の友人で新潟大学で鳥を見ている人もいますし、新潟市周辺で鳥を見ている人達も知っているので、今度紹介しましょう。ところで好きな鳥とかはいますか。

N：好きな鳥ですか？うちの回りでよく見る鳥でカワラヒワですかね。すごく高い良い声で鳴いて、飛んだ時に黄色の羽がきれいで、また小さいのでかわいいという感じがして好きです。あと、前に黒埼の田んぼで見たアマサギがきれいでした。

M：アマサギはあのあたりでよく見られますよね。

N：オレンジっぽいあの色がきれいですよね。

M：新潟県支部で支部報や本を出しているんですけれど、読んだりしますか。

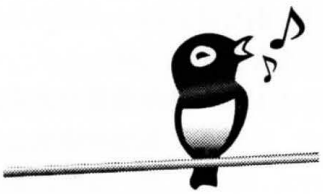
N：支部報とかはちょっとパッと見るんですけれど、じっと読んでる時間があまりなくて。

M：ちょっと文が多すぎますかね。

N：研究発表っぽいですよね。

M：すみません。うちの支部報は確かに研究発表に力をいれている面があるんですが、そればかりにしたくはないんですよ。ただ、なかなか原稿を書いてくれる人がいなくて、新たな人を見つけてその人にいきなり原稿を頼むのも悪いものですから、今回初めてこういった企画を考えたんですよ。
ところで外に鳥を見にいかないでも、新潟大学のキャンパスでも色々な鳥が見られると思いますが？

N：5月にキャンパス内ですごくきれいな声で鳴いている鳥がいて、オオルリですかね。



青い色がとてもきれいでした。あと木の電信柱をつっついているキツツキがいて、それは夏ですが、赤い色があったんでアカゲラですかね。見た時はびっくりしました。

M：図鑑などを見ていて、この鳥を見たいという鳥はいませんか？

N：カワセミを見たいと思うんですよ。あとカワセミの仲間で赤いやついますよね。あ

れも見たいです。

M：アカショウビンですね。カワセミならまだ見やすいですけれど、アカショウビンは声を聞くのはまだしも、姿を見るのは大変ですね。

同級生の方とか、鳥を見始める人はいませんかね。

N：身近にはあまりいません。意外と興味はあっても探鳥会に参加するところまではいかないんですよね。探鳥会というと朝早かったり遠い場所で開かれたりとなかなか参加しにくい面があると思うんです。あと探鳥会は、グループの中で行われているというイメージがあります。お互い知り合っている人達が集まっていて、一人でいっても自分がのけ者というとおかしいですけど、そんな感じになっちゃうんじゃないかなあという不安があります。探鳥会に出ていても、ベテランの方々がすぐにあれは～、これは～とおっしゃるんじゃないですか。一声聞いただけでも種類がわかったりして。そうすると私は全然わからないものだから、ただボーッとながめている状態ですか。

M：そういうことをなるべく解消しようと、今回のようなビギナーズ探鳥会を開いているのですが、探鳥会に参加する人数が増えるとどうしてもそういう状態になりがちな面はあると思います。その点は探鳥会を開く時の反省点ですね。

N：やっぱり初心者には小人数の方がわかりやすいですかね。

M：わかりました。色々貴重な意見をいただいたので、今後の支部報や探鳥会の運営に生かしていけたらと思います。本日はどうもありがとうございました。

酔っぱらいのさえずり

柏崎市　小林成光

最近寄るとさわると、酔っぱらい達の国会討論もどきが始まる。議題は改正男女雇用機会均等法についてだ。いつも話は本題からそれて盛り上がり、深夜に至ってしまう。

A:求人案内でカメラマンや看護婦募集は差別だからダメでホステスはOKだって？　B:外国じゃ嫌らしい視線だけでセクハラになるみてだが、お前みてえに生まれついての嫌らしい顔はどうせば良いんで？　A:ムムッバカヤロー！　A:アッ、バカヤローは差別用語だで！　A:そうせば「ばか旨んめかった」のバカは丁寧語だが使っちゃ一駄目ヶ馬鹿げたはなしだ。C:図鑑に出てくるバカ松茸やバカ貝はどう成るんで？　A:そもそも近所の雷おやじや、親や先生がバカヤローを言わなく成ってから日本がおかしくなったんだ！又々酔っぱらい達のさえずりは明日になってしまった。

以前、広報紙に「柏崎の野鳥」を書いてほしいと依頼があり、コクガンを書いたことがあった。その中で、「あまり人を恐れないコクガンを、港の漁師は『バカ鳥』と呼んで親しんでいる」と事実を書いたら、バカは差別用語だからと、その部分はボツになった。私も漁師の人も障害のある人を差別する気は毛頭無いが、知らない間に関係者を傷つけているのかもしれない。

訂正：前回支部報（№46）のマイ スコープ後澤正知氏の「市街地で繁殖するアオバズク」のところで“雛は1995年4羽、**1996年4羽、**1997年0羽、1998年2羽がすだった。”の太字の部分の貴重な記録がぬけていました。訂正してお詫びいたします。

発　行　1999年3月30日　№47

発行人　大島　基　　編集者　小林成光、末崎　朗、千葉　晃

日本野鳥の会新潟県支部

事務局　〒951-8116 新潟市東中通1番町86番地28

TEL 025－229－2018　本間由紀子方　〈振替口座〉00610－1－6002